

## 医 動 物 学 調 査 報 告

医動物学班の調査目的は、ペルーの風土病であるオロヤ熱、エスプンディア(ウタ)、マラリアの分布調査と医用貝類の採集であった。

5月31日 リマ到着後、調査隊の身元引受人になってもらった伊藤正則氏に厚生省、研究所の案内を依頼した。6月3日 HOSPITAL CENTRAL E-MPLEADO(通称、サラリーマン病院)に日系二世で内科医長をしている足立博士を訪問し、ペルーにおける疾病の状況をききながら院内を見学した。この病院は月給をとっている官公庁、会



社、商店に勤務する人々の医療機関で、南米第2の大病院といわれるだけに13階建の高層ビルである。ベット数1,200床、医師330名、歯科医師100名、看護婦その他を含めて病院勤務者3,500名の大病院である。日系の医師は足立博士を含めて3名、他に看護婦2名、助産婦1名の日系の人たちが勤務していた。足立博士は数年前に1カ年間、癌の研究のため東京の佐々木研究所に留学していた。ペルーは医師が6,500名程よりおらず、日本全部の面積の約3倍もあるペルー全国に医療がいきわたるには医師が不足している。医科大学または医学部のある大学は全国で15あるが、一大学の定員は50~80名であるので、当分、この状況はつづきそうである。したがって医師は1日6時間国立又は公立の病院、診療所に勤務する義務があり、他の時間に開業をするという規則になっている。この病院と対称的に日給をとる人々のためにサンマルコス大学の前に HOSPITAL OBRERO (労働者病院)がある。この他に慈善病院としてリマの人たちに知られている HOSPITAL DOS DE MAYO (5月2日病院)がある。また、海軍、陸軍、警察の病院もあり一応医療の面はリマでは充実しているようであった。

7月13日 厚生省に大臣の医学担当顧問 (MEDICO ASISTANTE) の EDUARDO GUILLEN ORALLE 博士を訪問して、ペルーの風土病について話をきく。博士はマラリアの専門家で、主としてペルーのマラリアについて説明をしてくれた。1957年までのペルーは海岸地帯、山岳地帯、森林地帯いずれもマラリアの患者が多く、リマ付近でもマラリアにかかり死亡するものが相当あった。1920年にはリマでマラリアにかかった者24,288名、死亡者137名という古い統計がある。1957年、ORALLE 博士が中心となって、ペルーのマラリア防遏計画がたてられた。その計画によると、リマに SNEM (SERVICIO NACIONAL DE ERRADICACION DE LA MALARIA) [国立マラリア防遏所] の本部をおき、全国を6カ所に分け、それぞれの中心都市に支所をおいた。

第1地区：(支所=PIURA)

TUMBES県、PIURA県、CAJAMARCA県、LAMBAYEOUE県、AMAZONAS県の1部

第2地区：(支所=TRUJILLO)

SAN MARTIN県、LIBERTAD県、ANCASH県

第3地区：(支所=TARMA)

HUANCAVELICA県、HUANUCO県、PASCO県、JUNIN県、AYACUCHO県、LORETO

県の CONTAMANA 以南全部 CUZCO 県北部少々。

**第4地区：**(支所=CUZCO)

CUZCO 県、PUNO 県、APURIMAC 県、MOQUEGUA 県、TACNA 県

**第5地区：**(支所=IQUITOS)

LORETO 県の CONTAMANA 以北全部、AMAZONAS 県の大部分

**第6地区：**(支所=ICA)

LIMA 県、ICA 県、AREQUIPA 県

この防遏活動により1964年までに海岸地帯、山岳地帯のマラリアはほとんどなくなった。この防遏に使用した費用は毎年5,000万 ソーレス (6億5千万円) にもおよんでいる。マラリア減少のため防遏のための地区は次第と縮小されて、1965年度より、第1地区と第2地区は合併して、第1・2地区と呼ばれるようになり、第6地区の支所は ICA から LIMA の本部に移った。

1964年9月発表の SNEM の報告によると、ペルー全国のマラリア患者は検査人数45,856名の中で204名 (0.4%) であり、3日熱マラリアは137名 (67.2%)、4日熱マラリアは11名 (5.4%)、熱帯熱マラリアは53名 (26.0%)、混合マラリアは3名 (1.4%) であった。この報告のようにマラリア患者は減少しているが、検査を受けた国民の割合は1.4%にすぎないので、ペルーにおけるマラリア患者が日本のように全く無くなるには相当の年月を要すると考える。しかし交通不便なペルーで、ここまでマラリア防遏に努められた SNEM 関係者に敬意を表したい。

7月14日 ORALLE 博士の紹介で INSTITUTO DE SALUD OCUPACIONAL (国立産業医学研究所) を見学した。所長、RAMÓN VALLENAS 博士に研究所の概要をきいた。この研究所は化学部、保健部、産業医学指導部に分かれていて、2階建の研究所の階上は全部化学部であり階下の右半分が産業医学指導部、左半分が保健部になっていた。化学部は ZENON A. SEDANOR 博士が案内してくれたが、主として鉱山の環境衛生を研究していて、わが国でも問題になっている粉塵、有害物質についての研究が多かった。この部には機械関係の研究室があり、騒音、振動についての研究がみられた。産業医学指導部はメキシコ、コロンビア、エクアドル、チリ、アルゼンチンなどの技術者に産業医学を指導するところで、毎年数名が留学するとのことであった。保健部は部長の MARIA T. ESPINOZA 博士が案内し、部の内容を説明してくれた。ペルーの鉱山は環境衛生の設備が十分でないので、硅肺、鉛中毒、砒素中毒の患者が多く、この部で患者の発見と治療に当たっているが、鉱山労働者7万人の保健の問題はペルーでは重大であるといっていた。この産業医学研究所は鉱山労働者の税金1,800万ソーレス (2億3千万円) で1958年に建設されたもので、維持費も労働者の税金で賄われているという。

7月14日15時 ORALLE 博士の案内で SNEM の本部を訪問した。EYZAGUIRRE 博士の紹介で第5地区の日系二世松野博士にあい、イキトスでの再会を約束した。この SNEM を訪問したのはマラリアのことをきく以外に、私の専門にしている医用貝類の研究者 JUANA ARRARTE OVALLE 博士にあうこともあった。OVALLE 博士は SNEM の生物学部長で、サンマルコス大学医学部卒業以来ペルーに分布する陸産貝類および淡水産貝類について研究していた。私の“日本産マメタニシの分類学的研究”という医用貝類の論文を贈呈したところ“MONOGRAFIA SISTEMÁTICA DE LOS MOLUSCOS DE TIERRA Y DE AGUA DULCE DE LIMA Y AL-REDEDORES”なるリマおよびリマ付近の医用貝類の分類学の論文と淡水産貝類の貴重な標本を私にとどけてくれた。

この論文によるとリマおよびリマ付近に生息する淡水産貝類はサカマキガイ科のもの2種、ミズツボ科のもの1種、モノアラガイ科のもの1種、カワコザラ科のもの1種、Helisoma 科のもの2種が記載されている。サカマキガイ、モノアラガイ科に属するものは日本では肝蛭の中間宿主とし



てよく知られているが、ペルーではこの点まだ研究が進んでいない様子で、今後の研究課題として期待がもたれた。

7月16日 リマを出発、イキトスに行く。イキトスには SNEM の第5地区の支所がある。支所の松野博士はリマより帰任していなかったが、所長の ISMAEL ARRUNATEGUI VELÁSGUEZ 博士に第5地区の状況をきいた。第5地区の防遏活動をしている面積は日本全面積より広い40万K M<sup>2</sup>もある。交通不便で、ほとんど道路がないので57隻のモーターボートを使用して水路を利用して活動しているという。第5地区のマラリア防遏作業は他の地区より遅れて1958年11月より開始した。まず実施に当りこの地区を9方面に、1方面を2～4区に分け合計27区とし、それぞれの区に主任をおき、77名の係員が採血、DDT撒布、治療薬の投薬に従事した。マラリアの患者はブラジルとの国境をなす YAVARI 河流域、エクアドルとの国境をなす PASTAZA 河流域および LORETO 県のはぼ中央の CHAMBIRA 河流域に多い。1958年11月マラリアの検査をした当初は受検率0.1%という低率で、検査人数は309名にすぎなかった。しかしマラリア陽性者は18名(5.8%)もあった。第1表に示すように防遏活動が1959年に入り進展すると、受検率も伸び、陽性者が急激に増加した。1960年にはマラリア媒介の蚊(アノフェレス)の駆除とマラリア患者の治療が徹底して行われたので陽性率が激減している。1960年以降は患者は減少する一方であるが、第2表に示す1965年の検査結果のように陽性率0.4～0.7%を上下している。マラリア患者は三日熱マラリアが最も多く熱帯熱マラリア、四日熱マラリアがつづいている。



1964年度の統計によると、第5地区の人口は294,845名、家屋数55,448軒、部落数1,448という。この人口で受検率が1.0～3.1%という低率であるから、陽性率が低くなったといっても、この地区のマラリアは安心ができないと考える。

8月19日 ペルーにおけるオロヤ熱の研究  
者、LUIS ANTONIO ALDANA 博士を創